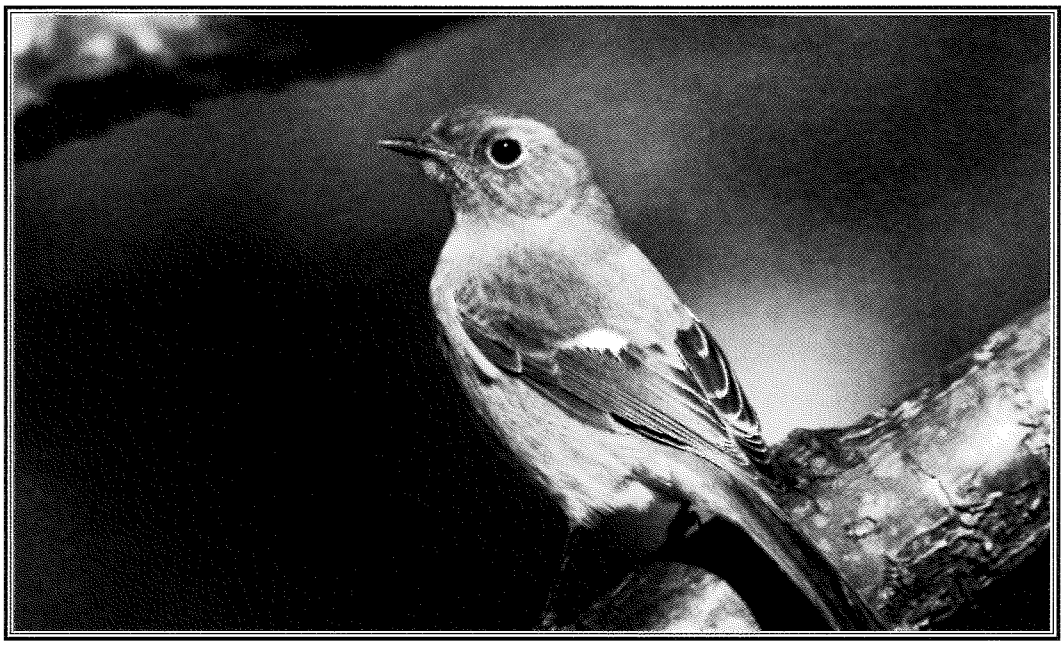
# あるむぜお98

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 98　2011年12月20日



撮影：影山昇

目次

1-2 渡り鳥ってナンダ？
③渡り鳥は何をしているのか？

3 展示会案内
特別展　あしもとネイチャーワールド
冬鳥来訪～渡り鳥ってナンダ？～

4-5 ノート　是政 鹿島神社の懸仏

6 知る人ぞ知る！　府中ゆかりの人物
③源　頼義

7 最近の発掘調査
府中第三小学校で中世瓦が大量に出土

8 収蔵資料あれこれ
侠客小金井小次郎の書状

身近な自然を再確認する目的でスタートした展示会「あしもとネイチャーワールド」シリーズの次回(来年1～3月)テーマは渡り鳥を予定しています。本誌の表紙では、府中で観察できる冬鳥の代表種を市内在住の影山昇氏（府中野鳥クラブ）の写真で4回にわたり紹介します。

## 冬鳥図鑑③　ジョウビタキ

府中周辺で見られる冬鳥の代表種は、①で紹介したツグミと、このジョウビタキです。園内の至る場所で見られ、樹木の果実や飛行中の虫を捕まえて食べています。単独で行動し、さえずりは繁殖期が中心であるため、日本で彼らの声を聞く機会はほとんどありません。名前の由来が、ヒタキ類で最上という説もあって非常に綺麗な鳥です。写真はメスを撮影したものです。

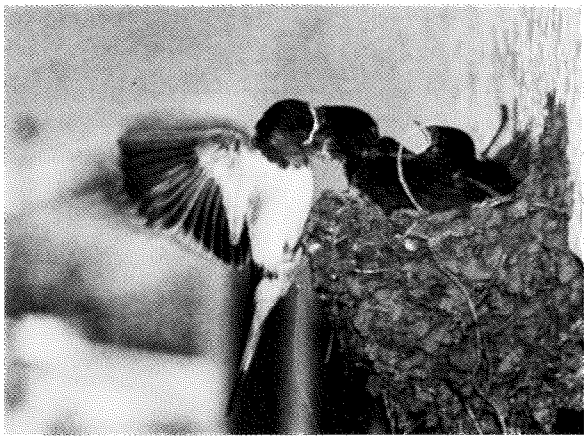
# 渡り鳥ってナンダ？

## ③ 渡り鳥は何をしているのか？

“渡り”は季節的な往復移動であり、日本に渡来する時期によって夏鳥・冬鳥等に区別されることを今まで説明してきました。但し、場所によっては夏と冬が逆転することもあります。たとえばツバメは通常夏鳥として渡って来ますが、一部の地域では越冬する冬鳥がいます。この場合は一年中見られるため留鳥とも言えます。しかし実際には、通常の夏に渡って来るグループは秋になると南へ帰って行き、越冬のため冬に来るグループとは入れ替わっていて、夏鳥・冬鳥の両集団が来ているのです。一応の区分がされているものの、厳密ではないことを断っておきます。

さて、4・5月頃になると東南アジア方面から夏鳥が渡って来ます。種類によって時期は微妙にずれるものの、5月中旬くらいまでには揃ってきます。それぞれの種が、主食となる食物のピーク時に合わせて日本を訪れるのです。これは、夏鳥の主たる渡来目的が繁殖にあり、育雛に必要な食物の確保が大前提と考えられるからです。夏鳥では雄が先に到着し、さかんにさえずりながら縄張りを構えていきます。後から到着した雌は、気に入った雄の縄張りに入ってつがいを形成します。その後、巣作りが行われると、雌は卵を産んで抱卵(温め)を始めるのです。一連の繁殖行動が正確にいつ行われるのかは、巣内に雛がいる時期に最も多くの餌が確保できるタイミングを見て決定している傾向があるようです。

繁殖活動を終えた夏鳥には、もうひとつの仕事があります。それは、留鳥同様の夏場の換羽です。羽毛は軽くて丈夫な構造物であり、鳥にとって最大の装備です。繊細な構造を持つゆえに、傷んだり寄生虫が棲みついたりし易く、そうなれば飛翔や保温の効果を下げることに繋がってしまいます。そこで鳥は年に一度、羽毛を更新するのです。繁殖活動と同等のエネルギーを要するため、換羽は繁殖時期とは重ならないようにして行います。活発に動き回って餌を集める時期に換羽を行えば、飛翔にも影響を及ぼすこととなるので、そのリスクを避けているのでしょう。換羽時期には鳥はあまり動かず、じっとしていますが、南へと帰るタイミングを計りながら換羽を達成し、好機に飛び立って行くのです。

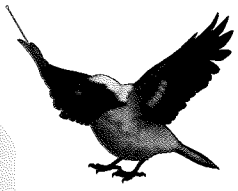


**夏鳥の代表種・ツバメの子育て**

**出典：『日本野鳥大鑑 鳴き声333 下』（1996年　小学館）**

一方、越冬目的の冬鳥は、繁殖地のシベリアが雪と氷に閉ざされ、食物が十分に確保できなくなるため南を目指します。鳥は低温動物なので、気温の変化にはそれほど左右されず、決して寒さを凌ぐための移動ではありません。夏鳥のように日本で繁殖もしません。但し、カモ類については、渡来した雄が換羽を行い、目立った羽色をまとって雌にアピールします。越冬地でつがいを形成し、繁殖のため再び北へと帰っていくわけです。冬鳥が北に戻ってから繁殖する理由については、寒帯地方の夏が高緯度のため、昼間の時間が長く、春から夏にかけては温帯地方以上に生物量が増加するからと考えられています。

北から南から…繁殖と越冬…方角・目的こそ異なるものの、共通項は良好な餌場を求めての旅。大空を自由に飛べる翼を武器に、全知全能を傾けて長距離を完走する渡り行動こそ、極めつけの生活戦略と言えるでしょう。　（中村武史）



あしもとネイチャーワールド

# 冬鳥来訪

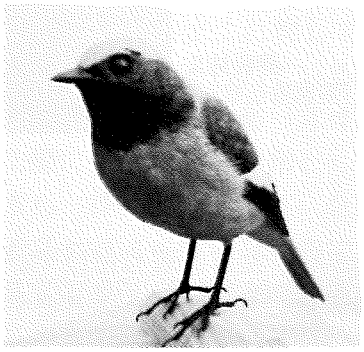
～渡り鳥ってナンダ？～

2012年1月28日(土)～3月11日(日)

会場：博物館本館1階 特別展示室
観覧無料

96号から連載している「渡り鳥ってナンダ？」を、展示バージョンで開催します。留鳥・漂鳥に冬鳥が加わる、豊富な冬季の野鳥たちを剥製標本やバードカービング(木彫り)などで紹介します。

秋から冬にかけて、府中周辺で観察できる野鳥の種類には変化が生じます。誰でも知っているスズメやカラスは相変わらず目につくのですが、春から夏の間に目立ったツバメなどは姿を消し、かわってカモの仲間やジョウビタキ、ツグミなどが見受けられるようになります。これは、北方から日本に渡って来る冬鳥たちが加わるからです。



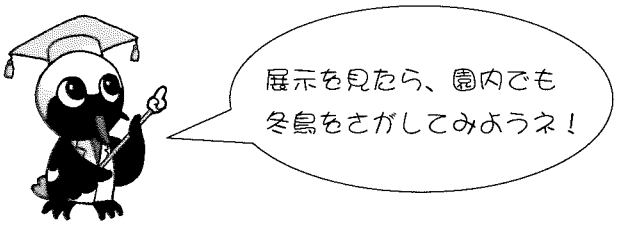
ジョウビタキ（カービング）

一年中見られる留鳥、冬場に山から平地に下りてくる漂鳥、そして冬鳥と、大方の生物が活動を始める春が訪れる前にもかかわらず、野鳥だけは色々な種類が堪能できます。府中には浅間山や段丘の雑木林、多摩川の河原など、野鳥が生活の場とするには絶好の環境が豊富に存在します。多摩川に沿った当博物館の園内も、良好な生息環境を作り出しています。展示会では、府中の環境別に見られる冬の野鳥を本館所蔵の標本を使って解説していきます。通常見られる野鳥に混じって、果たしてどのくらいの冬鳥が入って来ているのでしょうか。

ツグミ（剥製標本）

一方、長い距離を自身の体力をフルに使い、はるばる移動して来る鳥の目的は何なのでしょう？普通に考えれば、遠い国から海を越え、体力消耗のリスクを抱えながらも日本にたどり着くという大仕事です。しかも季節をかえて北から南から別の種類が入れかわり飛んでくるのです。何やら餌にヒントがありそうですが･･･ひとつ考えてみましょう。

（中村武史）




同時開催
企画展　影山昇写真展

## 野鳥の瞬間

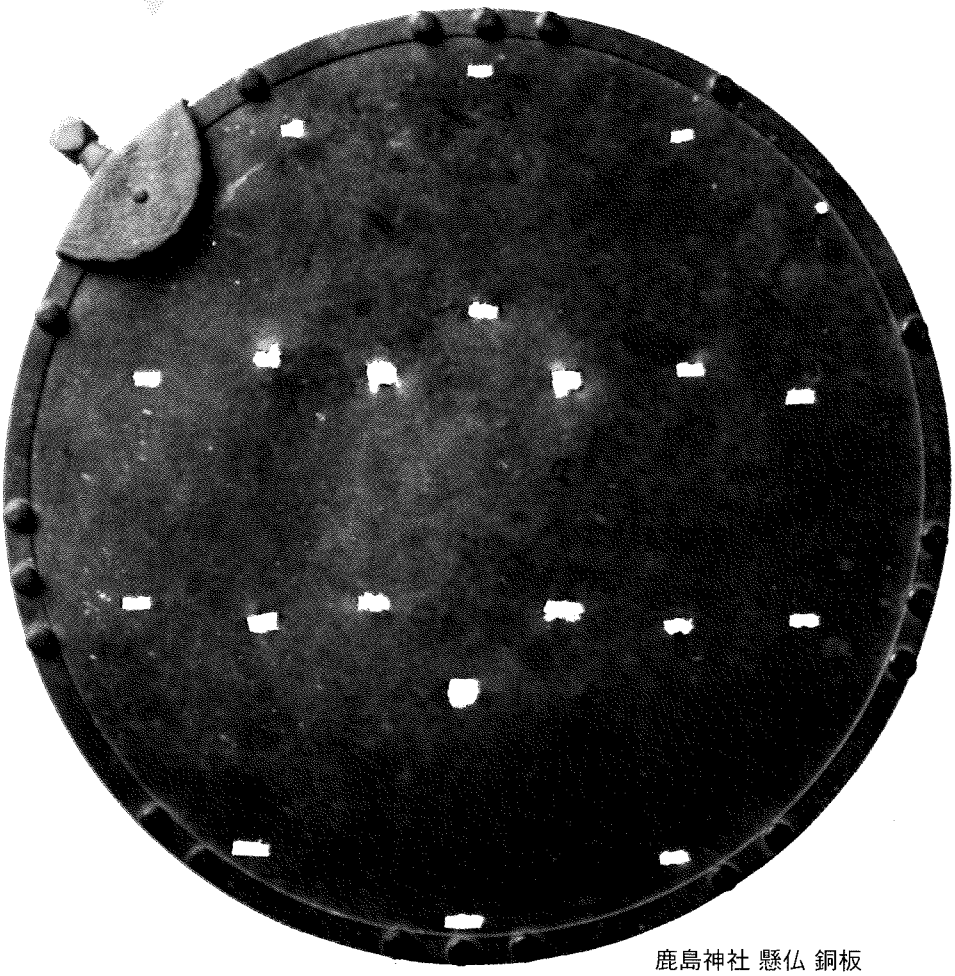
開催中～４月８日(日)

府中野鳥クラブ会員の影山氏撮影の力作が並びます。自然の中で一瞬の動作を捉えた写真に見る野鳥たちが、剥製標本とは異なる趣きを与えてくれるはずです。

NOTE

# 是政 鹿島神社の懸仏

深澤 靖幸



鹿島神社 懸仏 銅板

大日如来像

薬師如来像

十一面観音像

銅板銘文
「刑部宗弘敬白」
の部分

## ▼ 鹿島神社の懸仏

今日では、懸仏を目にすることはほとんどないかもしれません。懸仏とは、銅製の円板に仏や神の像を表したもの。礼拝の対象として堂社の壁や柱に懸けられました。平安時代後期に誕生し、鎌倉から室町時代に盛行しました。御正体ということもあります。

府中市是政3丁目に鹿島神社という小社があり、ここに鎌倉時代の懸仏が伝えられています。これは、府中市の文化財に指定され、現在は当館で保管・展示をしています。

後述するように、この懸仏は出土品であるため、当初の姿をとどめてはいません。銅製の円板と、鋳銅製の十一面観音像・大日如来像各1体、薬師如来像2体が一緒に出土したようです。円板の直径は35.3cmで、一方を失っているものの、左右上方に花形の吊り金具を取り付けています。4体のうちこの銅板に伴うのは、大きさや形態から、やや大型の薬師如来像１体を除く3体と考えられます。もっとも銅板には、合計20個の孔が穿たれていて、当初は上段3体、中段4体、下段3体、計10体の像が取り付けられていたとみられますが、残されている十一面観音像・大日如来像・薬師如来像の取り付け位置は不明です。このようにこの懸仏は欠損が著しいのですが、3体の像には金メッキが残り、吊り金具には細やかな彫金技術を見ることができます。

そして、懸仏の銅板には、次のような銘文があります。

刑部宗弘敬白
弘安七年十一月二十五日
右為諸願成寿(就)也

針のような細い金属で引っ掻くように刻まれているため見にくいのですが、「刑」の右に「西」の字があるとして、武蔵七党の一つに挙げられる西党の刑部宗弘による寄進とする見解が古くからありますが、その判読にはいささか無理があると考えます。刑部宗弘の素性は明らかではありませんが、弘安7年（1284）の銘を持つ、鎌倉時代の稀少な遺品であることに変わりはありません。

## ▼懸仏の来歴

先にこの懸仏は出土品だといいましたが、出土したのは江戸時代のことです。江戸時代後期の19世紀に著されたいくつかの地誌に、関係する記事があります。『武蔵名勝図会』には「…寛文年中古宮の下より往古の神体并本地仏銅像などを穿り出す。…」、『新編武蔵風土記稿』には「…当社ハ元来コノ所ヨリ東ニアリシヲ。イツノ頃ニカコヽニ移セリトソ。其遷座ノ時カノ神体旧地ノ土中ヨリ得タリトイフ。…」と記されています。両者を総合すると、寛文年中（1661～1673）に行われた遷座の際に、東方にあった旧地から出土したことになります。

この懸仏の出土に関しては、上記2つの地誌の記述が広く知られているのですが、実は出土と同時期の記録もあります。建物の建築・修築の際には、記録・記念として関連事項を記した木札（棟札といいます）を建物内部に取り付けることがよく行われるのですが、鹿島神社には寛文の遷座=再建の時の棟札が残され、そこに懸仏出土の経緯も簡潔ながら記されているのです（この棟札も当館で保管しています）。

これによれば再建は寛文辛丑年=元年（1661）で、再興されるまで中絶の期間があったことがわかります。さらに、神社再興を主導したのは、再建された鹿島神社西隣にある西蔵院という寺院で、その企画に賛同して地元の河辺作左衛門さんと横山忠兵衛さんが金銭的な援助をし、再建の儀式は西蔵院の本寺である妙光院（府中市本町1丁目）の運隆住職が執行したのでした。地誌の記述が裏付けられるとともに、再建の詳細が明らかになったといってよいでしょう。

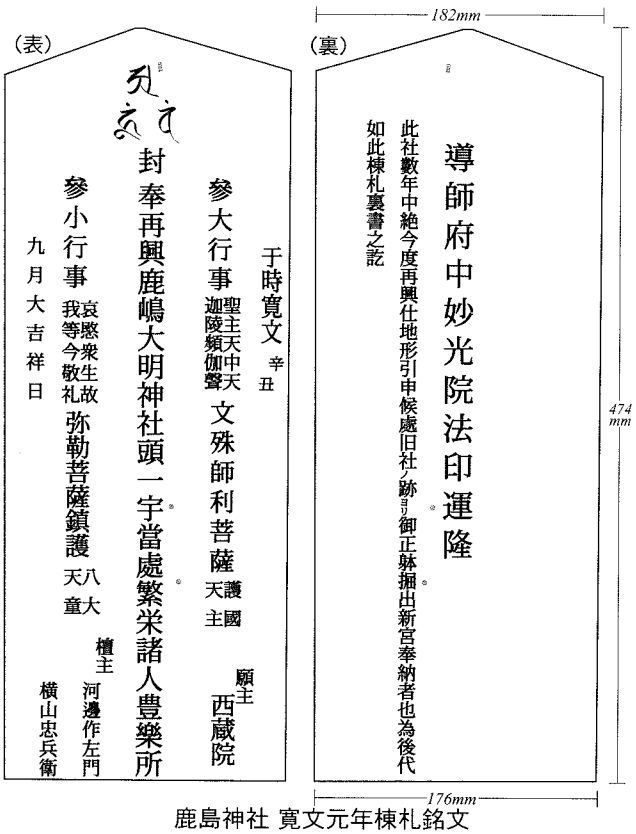
## ▼出土地はどこか

では、出土地つまり旧社地はどこなのでしょうか。旧社地こそ鎌倉時代の社地と考えられますから、何としても突き止めたいところです。これに関しては『新編武蔵風土記稿』の記述から、現在の社の東方であることが分かります。ただ棟札には、再興のために地面をならしたところ、旧社の跡より出土したと記されていますから、旧社は新しい社と近接していたと考えるべきでしょう。僅かに東寄りだったのではないでしょうか。

もう一つ注意したいのは、現在の鹿島神社は、「横山屋敷」と伝えられる場所にある点です。『武蔵名勝図会』は「横山屋敷」を武蔵七党の一つである横山党の居住地跡と述べています。現在、鹿島神社の周囲には土塁や堀の痕跡は見出せませんが、ここに中世の居館が眠っている可能性は充分あります。鹿島神社は中世の屋敷内に設けられた社であり、懸仏はそこに奉納されたものと考えたいところです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

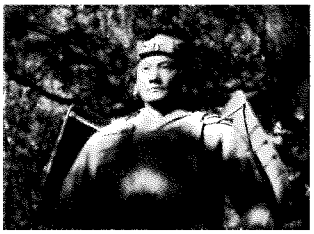
それにしても350年も前に出土したものが、伝えられ、その経緯まで判明することは驚きです。懸仏と棟札を大切にされてきた地元の方々に感謝せずにはいられません。



鹿島神社 寛文元年棟札銘文

# 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物

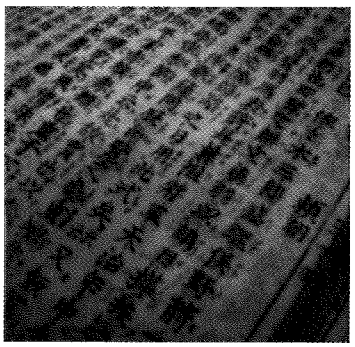
## ③源　頼義


源義家像

新田義貞像

２つの銅像は子孫　分倍河原駅前の新田義貞像、馬場大門けやき並木の源義家像。府中市内で銅像になっている二人の武将は、いずれも今回の主人公・源頼義の子孫です。分倍河原合戦（1333年）で北条軍を破り鎌倉幕府を滅亡に導いた義貞は、頼義の曾孫・義重から始まる新田氏８代目。「後三年の役」（1083～1087年）に武蔵武士らを率いて勝ち抜いた義家は、頼義の子息です。源頼義は、清和天皇の子孫・清和源氏の中でも、河内国古市郡（大阪府羽曳野市）に拠点を構えた河内源氏の２代目で、下総で起きた「平忠常の乱」（1028年）を父・頼信とともに平定し、鎌倉にも拠点を持つなど、後の鎌倉幕府誕生につながる大きな役割を歴史上果しました。

六所宮を北向きに変えた？　その源頼義・義家については、東北に遠征した「前九年の役」（1051～1062年）の際、府中の六所宮（大國魂神社）で戦勝祈願をして、凱旋時にけやき並木を寄進したという話がよく知られています。関連した伝承は、もっと古く、南北朝時代成立の『源威集』という軍記物に書かれています。永承６年（1051）、源頼義が坂東八カ国の兵を従え、京を出陣し武蔵国に逗留した際、奥州合戦の守護のため、南向きだった府中六所宮を北向きに改めた、と言うものです。この話が本当かどうか確証はありませんが、この平安時代末期の11世紀に、武蔵国府の街の景観が、国衙中心から総社（六所宮）中心へと大きく変わったことを象徴的に示したエピソードである可能性はあると思います。


『吾妻鏡』の源頼義。曩祖（先祖）将軍と呼ばれている。

中世武蔵府中の誕生に立会った　古代武蔵国府が置かれた府中では、奈良時代の8世紀にシンボリックな国庁（場所は今の大國魂神社境内東側）を中心とした国衙の建物群が整えられていきます。その形態が、平安時代の10世紀頃まである程度存続したことが、遺跡の発掘や「平将門の乱」に関する史料から明らかで、これは全国的な傾向でもありました。11世紀になると総社に関する記述も各国で見られるようになります。在庁官人と呼ばれる現地の有力者が国衙の政治を仕切るシステムの導入や、税所・田所・調所などのような「所」という役所に再編されていくのも同じ頃です。武蔵国衙に結集した武士たちが、鎌倉に拠点を置いた頼義の下に統合されていく過程で、府中においては古代国府から中世府中への新たな都市景観への転換が図られたと想像できるでしょう。鎌倉と府中を結ぶ鎌倉街道の原型のようなルートもできあがりつつあったのではないでしょうか。源頼義はその主役の一人であったのでした。

源氏が見てきた武蔵府中　「平将門の乱」は、武蔵介・源経基らの国府をめぐる紛争に将門が介入したことが出発点になったと言われています。実はその経基は頼義の曾祖父なのです。古代国府の終末を見届けた経基、中世府中の誕生に立会った頼義、幕府を立上げ府中を重視した頼朝。頼義の末裔に連なる新田義貞は合戦には勝ったものの動乱時代に突入し、やがて中世府中の政治的位置の喪失を導きました。河内源氏の系譜に連なる武将たちは、こうした中世の武蔵府中の歴史的な展開に大きく関わってきたのでした。

（小野一之）

最近の発掘調査

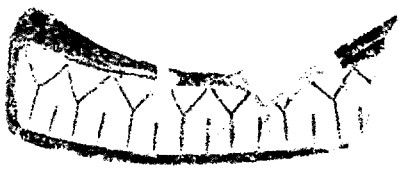
# 府中第三小学校で中世瓦が大量に出土

片町三丁目　府中市ふるさと文化財課　野田　憲一郎

元弘三年（1333年）、新田義貞率いる軍勢が鎌倉幕府軍と、府中の分倍河原において合戦を繰り広げた話は大変有名です。今回紹介する発掘調査は、かつての分倍の一角に建つ、府中市立府中第三小学校で行われたものです。調査の結果、南北方向の溝が２条発見され、この溝から、たくさんの中世瓦が出土しました。出土した瓦は、北西の溝から289点、南側の溝から37点を数え、軒先を飾る軒丸瓦・軒平瓦や鬼瓦が含まれていました（写真上）。出土した軒瓦には、中世に独特の、剣先を並べた文様の剣頭文（右拓本①）が見られ、このタイプの瓦は、埼玉県比企地方で13世紀末から14世紀初頭の鎌倉時代に生産されたものと考えられています。これまでに、第三小学校北側の崖線上の台地にある高安寺境内からも中世瓦は出土していますが、その多くは15世紀前葉の室町時代に造られた均整唐草文（右拓本②）で、剣頭文のものはごく僅かでした。

今回、溝から大量の瓦が出土したことによって、この溝の近くには瓦屋根の建物が存在し、その建物は中世の高安寺に関連した可能性が考えられます。高安寺には、武蔵国司の藤原秀郷の居館跡に建った寺が足利尊氏により再建されたという伝承があります。室町時代には鎌倉公方が陣所として度々滞在していますが、それ以前のことはよくわかっていません。今回の瓦の出土により高安寺の前身となる寺院が、鎌倉時代からこの場所に存在し、現在の敷地よりも南の崖線下へまで広がる寺域を有していた可能性が出てきました。

新田義貞軍と幕府軍との戦いでは、東村山市の久米川合戦で劣勢となった幕府軍が軍の立て直しをする際に「分倍」に陣をとっています。「分倍」の地は幕府にとって、鎌倉までの最終防衛線となる多摩川を守るための軍事的な拠点であったことは間違いないでしょう。今回出土した瓦の年代から想像を逞しくすれば、鎌倉時代に高安寺の前身の寺院がその軍事拠点の一角を担っており、そこをめぐっても合戦が繰り広げられたのではないでしょうか。

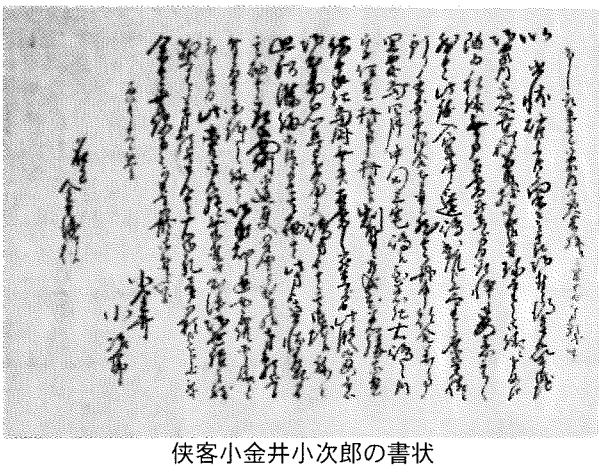


拓本①　剣頭文軒平瓦
（大國魂神社出土）

拓本②　均整唐草文軒平瓦
（高安寺出土）

# 収蔵資料あれこれ

## 侠客小金井小次郎の書状



侠客小金井小次郎の書状
当館寄託「新宿菊池家文書」

この写真は、江戸時代後期から明治時代にかけて、この辺の侠客として名をはせた小金井小次郎の自筆の書状です。小次郎は、府中の親分の藤屋万吉に目を掛けられて、博徒の世界に名を売り出したことから、府中に縁の深い侠客です。加えて、博徒の自筆の手紙が残っていることは珍しいので、今回はこの資料についてお話をしたいと思います。

まず、小金井小次郎の経歴を追ってみましょう。小次郎は、文政元年（1818）に下小金井村の名主の家に次男として生まれました。天保11年（1840）に博徒同士の喧嘩で人を殺めたことから役人に追われる身となり、千葉の木更津で捕えられ、同15年に石川島（現 中央区）の人足寄場に送られました。ここで、やはり侠客として有名な江戸の町火消の新門辰五郎と出合い、兄弟分の契りを交わしたと言われています。

弘化3年（1846）1月に本郷丸山（現 文京区）から出火した火事が人足寄場にまで及び、この時小次郎が辰五郎とともに消火に尽力したことが認められ、同年に赦免となります。

その後しばらくは博徒の世界から足を洗ったとも言われていますが、安政3年（1856）に博奕の罪で再度捕えられ、三宅島に遠島となりました。三宅島では、小金井から漆喰と石炭を取り寄せ井戸を設置したり、芝居を上演したりしたようです。約12年間の流人生活を送った後、慶応4年（1868）の正月に赦されて戻ってきました。

小次郎が三宅島にいる間に、日本の社会は大きく変化しました。島から戻った小次郎に隔世の感はなかったのでしょうか？その後は、布田五宿（現 調布市）に拠点を移し、明治になると伊勢参りに出かけたり、小金井神社に狛犬を献納したりし、明治14年（1881）に同地で生涯を終えました。

今回の資料ですが、これは安政3年8月11日に、三宅島から府中宿のうち新宿の名主に宛てて出されたものです。ここには、入牢から出帆までの厚情に対する礼が記され、三宅島の伊豆村に配置となったことが報告されています。そして、残してきた家族について、今後とも見捨てないで心添えとお世話をお願いしますと、その行く末を頼んでいます。当時小次郎は、妻のお関に府中宿で旅籠屋を営ませていますので、彼女たちの世話を依頼したものと考えられます。非常に達筆で、小次郎の識字能力の高さがうかがえる書状です。

小次郎の死後、彼を題材とした戯作や講談がつくられています。先駆けは、死の翌年に刊行された、三世柳亭種彦（高畠藍泉）が著した『落花清風慶応水滸伝』で、小次郎の生涯が躍動感あふれる筆致で描かれています。明治27年には、市村座で「新門辰巳小金井」という歌舞伎が上演され、その一場面を豊原国周が描いた浮世絵が発行されました。同23年に出された「近世侠客番付」で小次郎は、清水次郎長や黒駒勝蔵等とともに前頭に名を連ねています。今回取上げた資料は、このように戯作や講談、歌舞伎等の主人公として、当時の人々に良く知られた侠客・小金井小次郎の、実像がうかがえる貴重な１点です。（花木知子）

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意